

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 城野 真妃 所属: 北九州市立小倉総合特別支援学校 記録日: 2017 年 2月 22日

キーワード: 肢体不自由、コミュニケーション、やりとりの成立、語彙、動画・写真、学び方

【対象児の情報】

・学年 小学部1年生 男児(Yくん)

・障害名 脳性麻痺、知的障害

・障害と困難の内容

- ・床上では臥位レベルで、発声する際には、股関節に強い緊張が入る。
基本的な生活習慣は全介助であるが、左手で物を握ることはできる。
- ・2, 3語文で話すこともあるが、自分の気になる話題が中心である。
- ・斜視があり、眼鏡を装用している。文脈に沿った物や人を見ることは少ないが、見たいものは注視することができる。
- ・遠城寺式乳幼児分析的発達検査 DQ16



【活動目的】

○当初のねらい

- ①本児が生活の中で使っている言葉を記録・分析することで、語彙の理解や言葉の受容・表出の特性など、コミュニケーションに関する実態把握を行う。
- ②伝えたい内容や、伝えたい人を広げる活動を行い、他者とのやりとりへのモチベーションを高める。同時に、言葉でのコミュニケーションを補ったり、より具体的に伝えたりするツールとして、写真や動画を使用し、本人が「伝わった」という実感を多く経験できるようにする。

○途中から追加した点

- ・画面を「見る」というスキルが身に付いてきたため、②の内容に加え、言葉の学び方のツールとして写真や動画を積極的に活用する。

○実施期間 2016年5月23日～現在

○実施者 城野真妃・保護者

○実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

人と関わることを好み、他者に対して2、3語文で話しかけるが、TV番組や周囲の大人の言葉の模倣がほとんどであり、一方的な発信で終わることが多かった。教師からの「どれが好き？」や「トイレ行きたい？」、「今日は誰と来たの？」等の簡単な質問に対して答えることができず、「あのさ」や「あのですね」等の場をつなぐための言葉を言い続けたり、好きな話題を唐突に始めたり、自己刺激行動を始めたりする等の行動が多く、意味のあるやりとりが成立していなかった。さらに、構音や発声の難しさから、言葉での表出が不明瞭で、話している内容は聞き手に依存する状況であった。一方で、あいさつや号令などの場面における決まったパターンの表出は得意であり、自信を持って大きな声で言うことができていた。

○活動の具体的内容

〈 実践①-1 言葉に関する実態把握を行うために 〉

発語は多いが、模倣やパターンでの表出が多いのではないかと感じたため、本児が本当に理解して使っている語と、耳で覚えて言っているだけの語を明確にしようとした。児童の発語が活発になる時間帯である①登校～朝の会前、②昼休み(給食後) ③下校前 の時間、iPad のビデオ機能を主に使用して、3週間の発語を記録した。その結果、以下の表のような実態を掴むことができた。

○実態把握からわかったこと

ことばの受容、表出、増え方に分けて、実態把握を表にまとめた。

ことばの受容	・あいさつ等の慣れた定型文であれば、自分から返答することができる。 ・音声(ことば)だけで理解するのは難しいが、 具体物や写真を用いての選択(2択) ができるようになりつつある。
ことばの表出	・自ら想起して表出に結び付けることのできる語彙は、 生活に密接に関わっている人や物の名詞等 が主である。 ・理解している語彙であっても、 表出するには時間がかかる 。 ・語感や響きが気に入った 言葉やセンテンスを丸暗記 し、様々な場面で表出する。 ・定型句の使用場面を理解すると、模倣するだけでなく、 自分の言いやすい言い回しに変えて話す ようになる。
ことばの増え方の特徴	・核となる言葉を中心に、 実体験や直接操作を伴う ことでことばが広がっている。 ・気に入ったセンテンスの再生リハーサルを重ねることで、 使用する場面や文脈が合ってくる ようになる。

実態把握の結果から、本児のコミュニケーションの難しさは、「言える言葉」と「わかる言葉」に大きなギャップがあることが関係しているのではないかと考えられた。発語は多いが、その言葉が意味を伴うものは、「お父さん、お母さん、お茶、かばん、トイレ、友だち(数名)、先生(4～5名)、給食、拍手、ギター、連絡帳・・・」等、本児の生活に密接に関わる人や物の名詞がほとんどであった。そして、本児の話す2、3語文は、その多くが模倣であることがわかった。

しかし本児は、伝えたい気持ちや、人と関わりたい気持ちは強いいため、その時間や場をつないだり、保ったりするために「あのさ」という言葉を繰り返したり、文脈とは関係のない話を始めたりするのではないかと考えられた。

以上のような実態把握を踏まえ、
 '実体験を元にして「わかる言葉」を増やし、「伝わった」経験を多く積むことで、本児の「伝えたい」気持ちを支えることができるのではないか。' という仮説を立てた。

実態把握の時点での本児のコミュニケーションの難しさとして考えることを図に表したもの(右図)



【 実践①—2 伝えたい人や伝えたい内容を広げる取り組み 】

本児が伝えようとしている内容や、伝えたい人を校内で広げる活動も同時に展開していった。自立活動の時間にSRCウォーカーでの歩行などをする際に、校内で出会った教師や、育てていた野菜、好きな遊具の写真等を撮影する活動を実施した。基本的には毎回、学年外の教師1名には協力を依頼し、一緒に歌を歌ったり、かかわりあそびをしたりする機会を持った。協力依頼をする教師は毎回変えることで、多くの人と出会えるように設定した。1学期間に校内で働く15名の人の関わり場面を設けた。その他、偶然出会う人とも関わりを持つこともあった。

写真撮影の際は、iPadの画面をタップしての直接操作は難しかったため、スイッチコントロールのレシピ機能を使った。スイッチ (iPad用Bluetoothスイッチインターフェイスとジェリービーンスイッチ) 操作での写真撮影や、撮影した写真をスイッチ操作で、めくって見るという活動を行った。



(左) スイッチを使って写真を見ている様子

(右) 本児が撮った介助員さんたちの写真

○取り組みの結果と対象児の様子

人との関わりを好む児童であったため、学年外の教師との関わりに対しては積極的であった。一方で、関わりを嬉しいと感じて興奮すると、相手からの発信を全く受信できなくなり、自分の好きなTV番組のフレーズを言い続けたり、文脈とは関係のない話をしたりする等の様子が見られた。また、移動教室の際にそれらの教師に会うと、緊張が入り、何かしらの反応をしようとしている姿が見られたが、本児は、教師の名前をなかなか思い出せず、黙ってしまったり、「あのさ」という言葉を繰り返したりしていた。そこで「Keynote」アプリを使用し、写真と一緒に音声(撮影した写真の名前)が出るようにした。すると、対象児が音声を復唱して、教師の名前を覚えようとしている様子が見られた。

写真撮影に関しては、シャッター(スイッチ)を押すと、撮影できること、それをその後、鑑賞できるという因果関係が初めは理解できておらず、シャッター音を楽しむためにスイッチを押していたが、撮影と鑑賞を毎回繰り返すことで、徐々に理解ができるようになった。学年の



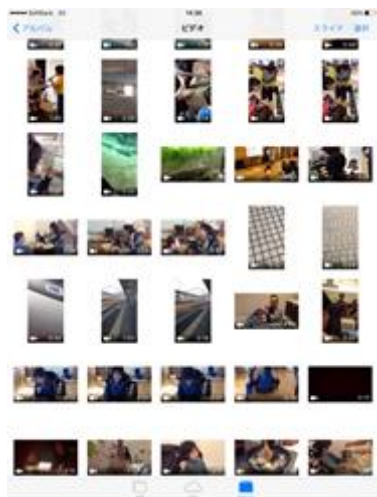
担任以外の教師に見せたいために「写真(を撮たい。)」と言うことも増えてきた。(6月中旬頃)

《 実践② 語彙を増やして、楽しくやりとりができるようになろう 》

○実践②-1 休日動画で言葉を増やそう

本児の言葉の増え方の特徴の1つでもある、実体験を伴うことで言葉が広がるという強みや、「連絡帳。」と言って、週末の様子を教師に伝える際に、連絡帳を使おうとしている様子から、この活動を実施した。実体験と言葉を1つずつ丁寧に結びつけていき、分かる言葉(語彙)を増やすことをねらいとした。

毎週末に30秒～1分程度の動画撮影を保護者に依頼した。撮影した動画は、国語の時間にTV画面で視聴した。その動画を見ながら、「どこに行ったの?」「何をしたの?」等と質問をして、経験をひとつずつ言葉にしていっていった。学習の中で、対象児が言葉に詰まってしまうたり、間違えて答えた場合は、教師が正しく言い換え、児童と共に再生するようにした。具体的には、以下のようなやりとりを行った。



・注意した点

取り組み始めたばかりの頃は、休日の写真をTV画面に映し、同様に行った。すると、TV画面の方に注目することが十分にできなかったため、聴覚的な情報の入る動画での撮影を原則とした。

例：休日に家族と新幹線を見学に行った日の動画

教:「これはなに?」 Y児:「新幹線」

教:「〇〇くんは新幹線に乗ったの?」 Y児:「乗ってない。」

教:「誰と一緒に新幹線を見ましたか?」 Y児:「おじいちゃんとおばあちゃんと、おとうさんとゆうくん。」

教:「うわ～新幹線は横を走ったら、風がびゅ～って吹いてるね。風は強い?弱い?」 Y児:「強い。」

教:「Yくんのこのお顔は、怒ってるの?びっくりしているの?」 Y児:「びっくりした。」

教:「新幹線ってゆっくり走るの?早く走るの?」 Y児:「早く走る。」

などなど・・・

○実践②-2「どこ?」「だれ?」クイズをしよう

休日動画の他に、校内の教師や友だち、場所等の動画を使い、「どこ?」「だれ?」クイズを行った。簡単な言葉でのやりとりができるようになることをねらいとした。休日動画と同様、TV画面に動画を映すことで、何を答えれば良いのかを明確にした。さらに、次のステップとして、より抽象度の高いイラストを使って、「給食はどれが好き?」等というやりとりも行った。イラストでは、質問者と受け手を教師と交代しながら行った。

○対象児の変化

実践①の実態把握にもあったように、実体験を伴っていることで、理解が早く、自分が伝えたい事柄から順に分かる言葉となっていった。上記の新幹線の例では、「びっくり」という言葉を一番に覚え、楽しそうに笑いながら、「びっくりしたんですよ。」と何度も言っていた。その後、教室で大きな音がして驚いた際にも、「びっくりした〜」と言い、生活の中でも学習した言葉を使っていた。

やりとりについては、実践②-1、②-2を通して、何を答えればよいのか、何を聞かれているのかという点を、動画を停止して目の前に提示することで、確実に答えることができるようになった(10月頃)。慣れて来ると、動画を1つ見終わった後に、「どこに行ったの?」や「何を買ったの?」等の質問をしても、答えられるようになり、短期的な記憶を保持する力もついてきた。(11月下旬頃)。

また、質問に答えることができるようになると、対象児が教師に対して質問してくることも増えてきた。以下は、休日動画で撮ってきた本児のお誕生日会の動画を見た後の会話である。

教師：先生も(Yくんがもらっているものと同じDVDを)同じの持ってたな～

Y児：城野先生はこれ、同じの持ってたんですか？

教師：これって何？

Y児：DVDを持って・・・クラシックを持ってたんですか？

教師：そうだよ。Y君、DVD見ましたか？

Y児：はい。

教師：何の曲が入ってましたか？

Y児：・・・(ちょっと考えてから) くるみ割り人形とか！



このやりとりの例から言えることは、DVD以外は、本児の目の前には提示されていなかったが、曲名を自ら思い出し(想起)、それを「くるみ割り人形」と言葉で伝えることができるようになってきているという点である。また、気になった事柄に対して、自分から教師に問いを発信し、3つのやりとりを成立させている。

また、誕生日プレゼントにハーモニカをもらったことを、音楽が好きな学年外の教師(←実践①-2で出会っていた)に伝えたいという思いから、「徳本先生」「ビデオ持って行く。」と言い、iPadを持って伝えに行った(12月中旬頃)。動画を見せながら話すことで、生活経験を共にした大人を介さずとも、「伝わった」という経験をする事ができた。

さらに、その経験を複数の教師に伝えている場面も見られた。伝えに行った際、「今度来るときは、電話してね。」と教師に言われたことを覚えており、「電話してね～って言ったんですよ。」等と自分の言葉で伝えることができていた。それらの経験を経て、さらに他の教師へ、他の教師へと伝えたい人が広がりを見せた。そして、実際に伝え、ポジティブな反応をもらうことで、さらに「伝えたい」という気持ちが、さらに高まった。

《 実践③ 見ること、選ぶこと、触れることに慣れよう 》

○実践③-1 選んでみよう

実践①の実態把握から、自分の意思を言葉で表出することが難しかったため、具体物やカード等を使うことで、自分の意思を表出する学習を行った。本児が表出しやすい方法を探ること目的に、遊具や飲み物の選択を行った。具体物での選択から始め、写真カード、イラストカードのように、できるようになったら、提示する物をより抽象化したものとしていった。



○実践③-2 よく見てあそぼう

見て楽しむおもちゃやアプリを利用して、この実践を行った。目で追った先に音の刺激のある、くるくるチャイムやボール転がしのおもちゃ、「Tap-N-See Now」、「I Fireworks Lite」アプリ等を使用して行った。

・注意した点

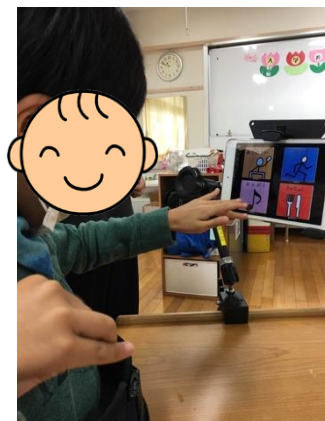
手と目の協応動作を高めるために、スイッチは使用せず、直接操作で行った。座位保持椅子に座ると、姿勢保持とタップの双方に注意が必要になってしまうため、ポチロールを使用し、あぐら座位での操作にした。

○対象児の変化

初めは、具体物の2択を提示しても、無反応であったり、車椅子の天板に伏せてしまったりすることが多かった(6月上旬頃)。原因として考えられたのは、次の2点であった。1つは、経験の不足。もう1点は、具体物を提示しても、視線をそちらに向けていない様子から、視覚的な情報を活用することに慣れていないのではないかとこの点である。そのため、実践③-2をスタートした。実践③-1と③-2を併せて行うことや、モデルとして、友だちが選択している様子を見ることで、具体物の2択が具体物にタッチすることで、できるようになった(6月下旬)。その後、写真カードでも出来るようになった(7月中旬)。「Tap-N-See Now」では、対象が大きいので、1つずつ確実にタップしている様子が見られるようになった。

○実践③-3 時間割係をしよう

ある程度「見る」ことに慣れたため、時間割のシンボルカードを覚え、友だちに伝える時間割係の仕事を始めた。始めは、スイッチ(iPad用Bluetoothスイッチインターフェイスとジェリービーンスイッチ)を押すと、iPadからシンボルカードと音声が出力されるように設定していたが、本児が覚えたカードから音声を無くし、自分で伝えるようにした。また、「SoundingBoard」アプリを使って、教科名(音)とシンボルカード(イラスト)を結びつける学習を行った。(シンボルカードをタップすると、本児の声で教科名が出力される)本児にとって、タップの操作は難しかったので、アプリだけではなく、カードも使用しながら、音→イラスト、イラスト→音を繰り返し学習した。



○対象児の変化

時間割発表をする際に、スイッチの音声を真似して復唱するようになった(9月)。楽しみにしている学習である「音楽」や「給食」のカードを覚え始めた(9月下旬)。シンボルカードを3~4枚覚えてからは、「SoundingBoard」アプリでシンボルカードを4枚提示すると、指定されたカードをタップしようとし始めた。手をうまく動かさずに、間違ったカードを

タップしても、音声のフィードバックを聞き、自分から再度、正しいカードにタップし直す姿が見られるようになった(11月上旬)。3ヶ月かけて、全9種類のシンボルカードを覚えることができた(12月上旬)。選択してタップをする際、3つ、4つ、6つと選択肢を増やしており、現在では、エラーもあるが、6つのシンボルの中から正しいものを選択してタップすることができるようになった。

できるようになったことに達成感を感じていたため、担任以外の教師にその姿を見せに行くと、たくさん褒められた。「先生、みて!」「こうやってできるようになるのでーす。」と、大きな声で誇らしげに言っていた。

【 実践のまとめ 】

○まとめ

本児の大きな変化としては以下の3点である。

・分かる言葉が増えたことで、場をつなぐためだけの言葉が無くなり、簡単なやりとりができるようになった。

さらに、分かる言葉を繋いで、2語文、3語文を自ら紡いで話すようになった。

→自ら想起し、伝えることのできる言葉が増えた。そして、5w1hの要素が揃ってきたため、何を聞かれているのか、何を答えればいいのか明瞭になってきたと考えられる。自分から他者に対して、「好きなパンは何ですか？」等と質問している様子からも、理解が深まったことを窺うことができる。さらに、教師に「今日の給食は誰と食べる？」と、その日の給食介助の教師を尋ね、自分で見通しを持つようになっている姿も見られるようになった。

・視線をコントロールして「見る」ことに慣れ、視覚的な情報を使えるようになってきた。

→ 教室に掲示してある時間割カードを見て、「給食の後は、学活。」等と言い、休憩時間に自分で確認している様子が見られるようになった。1学期の授業参観や、保護者懇談会では、母親の姿が見えると長い時間、激しく泣いていた。しかし、3学期の授業参観では、時間割表を見せながら、「授業参観でお母さんが来ます。でも、その後、帰りの会をしてから、お母さんと帰ります。」という説明をすると、泣かずに楽しく授業を受けることができた。このように、視覚的な情報を日常生活の中で生かす事ができるようになっている。具体的なものから、抽象的なものへの理解が進んでいるところである。

・「自分でできるようになりたい」という強い思いから、操作性が高まった。また、できない時は依頼できるようになった。

→ 時間割のタップをして、自分の録音した声を聞きたいという思いから始まり、現在では見せたい動画を再生するために、自分で何度もタップを練習している。できない時は、「先生、〇〇が見たいです。押してください。」と伝えることができるようになった。自分で何かを動かす経験の楽しさの経験を積んでいる。

○その他のエピソード

・伝えることについて

～学校では～

担任以外の教師にも、積極的に楽しかったことの動画を見せ、やりとりを楽しむ様子が見られるようになった。教師の名前も実践②-①の「どこ?」「だれ?」クイズで覚えているため、「〇〇先生～」と自分から声をかけて呼んでいる。お気に入りアルバムの中の見せたい動画を「先生が押して。」と依頼しながら、一緒に見ている。



～給食では～

意思を言葉で表すことができるようになり、自分の食べたいものを、食べたい順に食べることができるようになっている。担任以外の教師にも、言葉と指差しなどを併用して伝えている。

また、本児は上唇を閉じる力が弱いため、教師が口唇閉鎖の支援をしていたが、3学期になってから、「お口を閉じて、ごっくん。」という言葉の意味を理解し始めた。そして、自分で上唇閉鎖の介助をして、意識しながら捕食や咀嚼をすることができるようになっている。



～家庭では～

トイレでの排泄ができるようになっている。「トイレ行く。」と、自分で伝えることができるようになったため、成功する回数がかかり増えている。外出先では、「今、おしっこ出た。」と伝えることができている。

学校での出来事を、「ラーメン買った。」「家でもラーメン食べたい。」「スマホで(レシピ)調べて作って。」等と2語文で正確に伝えている。事実だけではなく、自分の要求も2語文で伝えている。

さらに、家族との会話も豊かになり、仕事から帰った母親に、「お帰り。今日はどうやった?」と言い、母がその日の様子を答えると、「ふーん、そうなん。大変やったね。」等と相づちを打ちながら聞く姿や、弟に「もう眠いから、あっちに行ってくる?」等と自分の意思や主張をする姿も見られている。

～放課後等デイサービスでは～

本児が毎日通う放課後等デイサービスにも協力してもらい、冬休みの様子を動画に収めてもらい、言葉の学習に生かす取り組みも実施した。言葉でのやりとりもできるようになり、「学校どうだった?」と聞くと「ボウリング行った。」等と2語文で返してくれることが増え、文脈と関係のない話をしなくなったという話を聞いている。

○今後の展開

本児は他者とコミュニケーションをとりたいという意欲は高かったが、それを成立させるための手段を持っていなかった。本年度の取り組みによって、分かる言葉を増やしてきた本児は、現在周りにいる大人とコミュニケーションをとっている。しかしながら、本児の発語の理解は、聞き手側の慣れや、本児の生活経験を少なからず把握しておく必要がある。そこで、3学期からは、より多くの人に伝える手段の獲得のため、平仮名文字の学習を始めた。現在は

言葉と写真や動画を併用して伝えることができ始めた段階であるが、先々は文字も使いながら、人とコミュニケーションをとることができればと考えている。そうすることで、生活経験を把握していない人もコミュニケーションを図ることが可能であると考えられる。また、文字で言葉を紡げることで、メールやSNS等、伝える方法も広がってくる。

今後も、ICT機器を、教科学習や余暇の楽しみなどで活用することで、対象児の世界を広げ、より豊かなコミュニケーションを行うことができるような環境を作っていきたいと考えている。

